

みんな

いのちの

おかげさん

じいじからあなたへの手紙

「氣力がなくなってきました。」

「やらなければならんことが、できません。」

大事なことが、スコンと抜け落ちます。もの忘れする、といったそんな簡単なことではありません。昨日できたことが、今日できません。この調子なら、きつと、今日できたことが明日できんやろう、と思うとがく然とします。

「その年齢になってみると、わからんことがいっぱいあるもんや……」と言われ、「そや、そや、どうなずく人がいたり、「そんな言いかた卑ひきようや」と反論する人がいたり。私は「そや、そや」の方です。

いつまでも若くありません。いつまでも元氣ではありません。いつまでも生きていることはできません。

生まれてこなければ、老いることも、病むことも、死ぬこともなかったのです。

お釈迦さまがお説きになった、人間の根本苦「四苦しじく」(生苦・老苦・病苦・死苦)は、私がこの娑婆世界はせかに生まれてきたことから、始まっているのです。

皆んなに祝福され、大きな喜びの中で誕生した「いのち」は、つぎの瞬間から苦の中で生きる「いのち」なのです。しかし「そんなこと、なんにも考えずに生きている人たちがいっぱいやなあ……」となげいても、しかたありません。

この『みんないのちのおかげさん くじいじからあなたへの手紙』は、西本願寺から出版されている「大乘」誌に、つれづれなるままに、その時その時の気持ちをつづった一編一編です。

その時から、また年齢を重ねました。老いも極まってきました。『仏説無量寿経』の中の「独生独死独去独来」のお示しが、いのちにしみこんでくるこのごろです。

「おかげさん」が、味わえるんです。

親鸞聖人のお言葉「自然法爾」が、ありがたくいただけるんです。

この本は、私の愚痴がいつぱいしまった、くずかごにすぎんと思っております。どうぞ、あなたの手で、くずかごをひっくり返してみてください。くずの中に、ひよつとして、一二二つ、捨てられんものも混じっているやも知れん、と思うのは私の欲ばり心(貪欲)であります。

まえがき..... 2

第一章

なんで、これほどに「傲慢」になったんや、
人間は。昔も、そうやったんか。

軒下と縁側と..... 8

そとで、まってる..... 14

友達と遊んでいるか？..... 20

飢えとガラクタ..... 26

共に生きる？..... 32

第二章

こら、その人、「加齢」の一言で、
わしの老いや病を片づけるな。

年寄りなかま..... 40

煮ても焼いても食えん..... 46

動かなくなる前に..... 52

凜として..... 58

第三章

「匂い」と「臭い」と..... 64

まちがいのない、いのちのこと..... 70

ひとつの織物のように生きてきた、

地球上のひとつひとつの「いのち」たちよ。

なにもできんか..... 78

「匂」が消える..... 84

田んぼのいのち..... 90

いのちの声..... 96

アマゾンには豊か..... 102

たった一つになった巣..... 108

地球から聞こえる声..... 114

第四章

後生の「大事」を、まっ白な骨が語りかけ、
指さす「終活」の二文字。

託す..... 122

おおきに、おおきに..... 128

第一章

な

んで、これほどに

「傲慢」びようまん になったんや、人間は。

昔も、そうやったんか。

第五章

一つの死について	134
清太はんのうしろ姿	140
まっ白な、骨	146
せっかくく出てきた「娑婆」。苦しんで苦しんで、 切なく生きるのが、ほんまやろ。	
並んで夜空を眺めよう	154
プーラン・プーラン	160
あたたかなちやぶ台	166
ほしいものが、ほしいわ	172
ひつつき虫の新天地	178
ひびきあういのち	184
おつかれさん、じゃあ（あとがきにかえて）	190

カバーイラスト・挿絵／徂徠 匡男

軒下と縁側と

にわか雨が降ってきた。君も、軒下へ避難だ。

雨樋があるから、ここならぬれる心配はない。雨やどりには、もってこいの場所だ。ビルのように軒がなければ、突然の雨に右往左往せねばならん。

じいじが子どもの頃は、この軒下と同じように、どこの家へも出入り自由だった。

玄関の戸は、いつも開いていた。開いていなくとも、いつもカギがかかっているわけではない。戸をガラガラと開けて入ると、そこは土間だった。土間は、なぜか、いつもすこししめっていた。土間のすみに、唐臼があつた。どこの家にもあつたわけではない。唐臼は、穀物の精製に必要なもので、米や麦を白くしたり、大豆を粉にしたり、用途に応じて、杵の先端をつけかえた。先端が丸い木製のものは、米や麦をふむときのもの。先端に金具がついているそれは、粉にするためのもの。

唐臼をふむのは、子どもの仕事だった。からだが小さいから、全体重をかけないと、唐臼の杵は持ち上がらなかった。

かくれんぼなんかしている時は、土間の上がりかまちから、はきものを持ってかつてのぼり、部屋のすみにかくれた。居間があつて、寝間があつて、客間があつて、客間には仏壇がかざられ、仏間を兼ねていた。仏壇の左か右は床の間か、押し入れ。

よその家の間どりがどうなっているか、子どもは皆んな知っていた。

部屋に逃げこんでくる子どもに、大人は、「こら、こら」と一応は叱つても、あとは知らん顔だった。

部屋の障子を開けると、そこには縁側があつた。そのそとに、雨戸があつたり、なかつたり。縁側つて、廊下ではない。そとと家のなかをつないでいる、ふしぎな場所であり、空間だった。なんのた

